

4 無痛文明における愛

しかしながら、無痛化する現代社会を鮮やかにいるどるのは、「条件付きの愛」のほうである。人々は、私も条件を満たすようにするから、あなたもまた条件を満たしてほしいというゲームに否応なく巻き込まれていく。条件を付けずに新しい生命を受け入れて行く道や、最初に付けた条件をゆっくりと脱皮させていく道を、無痛文明は巧妙に閉ざす。

無痛文明は、条件付きではない愛のあり方を嫌う。なぜなら、それは、無痛文明の根幹にある「身体の欲望」をつき崩していく危険性をはらんでいるからである。というのも、条件付きではなく相手を愛するということは、いまの自分がよって立っている枠組みを相手がつき崩しに来るかもしれないという危険性を、私が正面から引き受けることでもあるからだ。そういう危険な相手の存在を、まるごと承認し、肯定し、祝福するということなのだ。このような愛のあり方は、身体の欲望にとっては都合が悪い。この愛は、いまの枠組みを保持したまま肥え太りたいという無痛文明の根幹に反する。そんなものがのさばっていたのでは、無痛文明の展開のじやまになるだけだ。そればかりか、ひょっとしたら、無痛文明にあきたらない人々のこころを刺激して、妙な反乱を起

こさせるかもしれない。

だから、無痛化する現代社会のなかで、ひんぱんに見られるのは、「私の基本的な枠組みを崩さない限りにおいて私はあなたを愛してあげる、しかしもしあなたが私のことを崩しにかかってきたら私はあなたを見捨てる」という形の愛である。あるいは、「私の願望をあなたが満たそうとしている限りにおいて私はあなたを愛してあげるが、もしあなたがそれを満たすことを放棄するならば私はあなたを見捨てる」という形の愛である。もちろん、このような愛の形は古くから存在した。現代社会になってはじめて登場したわけではない。だが、自己家畜化が高度化し、生命と自然の管理が拡大し、予防的無痛化や情報操作のテクノロジーが急速に発展した現代社会において、「条件付きの愛」は、それまでとはまた異なった重みをもって、われわれの生と社会を支配しはじめていると言わざるを得ない。

「条件付きの愛」は、三つの形態をとる。

まず第一に、それは「支配の愛」となる。これについては本章でも繰り返し述べたし、すでに多くの人々によって指摘されてきたことであるから、ここでは多くを述べない。私があなたに望むことをあなたが満たしてくれる限りにおいて、私はあなたを肯定し、あなたにやさしくし、あなたをサポートする。そのような条

件を付けることによって、私はあなたの行動を支配し、感じ方や考え方を支配する。そしてもしあなたが私の望みを拒否するのならば、私はあなたの目の前で怒りをあらわにし、恫喝し、脅迫し、ときには暴力によって言うことを聞かせようとする。そしてそれでもなおあなたが従わないのならば、私はあなたの目の前で弱々しく崩れ落ち、涙を流しながらあなたの目をじっと見つめる。「お願いだからそんなことを言わないでくれ。あなたに去られたら私はもうひとりぼっちなのだ。誰も私の味方にはなってくれないのだ。お願いだから、私の前から去っていかないでくれ」。そう言うってあなたの前で床にひれ伏し、あなたが反抗するのをやめたあとで、私はふたたびまた同じ支配の行為を繰り返してゆくのである。

第二の形は、「やさしさの愛」である。やさしさの愛とは、あなたの希望をそのまま表面上受け入れて、抱きとめてあげるような愛のことだ。あなたが苦しかったと言えば、苦しかったんだねと肯定してあげ、あなたが慰めの言葉がほしいと言えば、すぐに慰めのことばをかけてあげる。そうやって、あなたが求めるやさしさの行為を、そのまますぐにあなたに返してあげるような愛。

無痛化する現代社会のなかで、われわれがやさしさの愛を求めるのは当然のことかもしれない。私のことを抱きとめてほしいと

思っても、それは私があなたの要求するなにかの条件をクリアーしているときに限る、という事実をいやというほど思い知らされたとき、私はとにかくこのままの私の存在を誰でもいいから受け止めてほしいと願うはずだ。たしかにこれは、傷ついた人に対するかかわり方の出発点としては、けっして間違っていない。

しかしながら、やさしさの愛の大きな問題点は、相手の存在をまるごと承認し、相手の望むことをそのままかなえてあげるという地点で立ち止まってしまうことだ。やさしさを受け取った人間は、やさしい言葉と態度から得られる快感を何度でも繰り返し味わいたくなり、そこから先に進むことを放棄して、やさしさの愛へのアディクション状態となる。愛を与えるほうも、「私は人を癒し、愛を惜しみなく与えることのできる人間なのだ」という甘美な幻想に、いつまでも浸っていることができる。こうして、やさしさを受ける快感をずっと味わっていたい人間と、愛を与える者という自己イメージを保持していたい人間とのあいだに共犯関係が成立する。

やさしさの愛は、ありのままの私を承認し、肯定し、祝福してくれるので、一見「条件付きではない愛」であるかのように見えるけれども、実は、衝突や対立を避け、お互いの枠組みを壊すような要求をけっして出さない点において、「条件付きではない愛」

からはもっとも遠い地点にいるのである。

このように、無痛化する現代社会においては、「支配の愛」が充満すると同時に、「やさしさの愛」もまた拡大する。やさしさの愛は、われわれをどこへも連れていけない。それが目指すのは、「反復」である。同じような癒しと快がどこまでも反復されていく世界。共犯と予定調和の世界。眠りとあきらめが支配する、出口のない、不安に満ちた快の世界。やさしく、やわらかな、生きながらの死の世界。

（書籍版に続く・・・）